

二十五回生 牧村（山崎）佳那子

オリオン座見つけろ俺思ふとき

ひとりぼらただひとりぼら守宮来ぬ

夫死後に届く吉報石路の花

夫の息残れる家や冬日和

汝のためのすみれのブルーケ黒を着て

げんげんや分教場は川向かふ

げんげん 紫雲英 蓮華草 千二小の時の思い出です。

雨の中本借りにゆく芽吹かな

歩くため靴ふんばつす樟若葉

ねがいごとありかたばみの種とべり

敗戦忌畑の闇を見てとりぬ

音たてて銀の紙降る春の夢

かすかに目に（もしかしたら頭に）残っている戦争の記憶だと思つています。銀紙がキラキラひかりながら空からたくさん降ってきました。細長い、リボンのような感じですが。でも本当に銀紙だったのか、白い紙に太陽がきらきらとあたっていたのかわかりません。ただこわくてこわくて：とおぼえています。それを俳句をするようになってから、「春の夢」にしてしまった句です。

夫の句を五句えらびました。私にとってほんとうにつらいことです。